石狩市民図書館 開館20周年

市民とともに歩む図書館

～ありがとう20周年、これまでも、そしてこれからも～

目次

2 図書館の中に街をつくろう

3 図書館の成人式 開館20周年 公開座談会

10 こんなことがありました 市民と図書館の20年

12 石狩市民図書館を支える ボランティア・団体の皆さん

13 開館20周年に寄せて

図書館の中に街をつくろう

平成12年6月3日に産声をあげた図書館は、
街の中に本屋が無かった時代に
「本の素晴らしさを子どもたちに！」と
市民が強く望み、生まれました。

目指したのは「新しいまちづくりの拠点」。
だからここには、特定の人だけが使う
昔ながらの図書館の印象はありません。
あるのは街の中に暮らすようなイメージ――

本を読む、勉強をする、野菜を買う、アイスを食べる、
そんないろいろなことができる図書館は、
今では、小さな子どももお年寄りも
誰もが安心して過ごせる空間となりました。

たくさんのボランティア・関係団体の皆さんに支えられ、
人と本をつなぎ、歩んできた20年。
これからも変化をいとわず、
市民の生活に寄り添いながら未来へと向かいます。

数々の賞を受賞している建物は、誰もが使いやすいバリアフリー構造。
その施設のバリアフリーに加えて、市外の方も利用登録ができること、
貸し出し冊数の制限がないことなど、利用においてもバリアフリーであることが当館の特長です。

平成12年（開館年）　蔵書数123,235冊、本館来館者数228,927人 ／ 令和元年現在　蔵書数327,678冊、本館来館者数 累計5,456,729人

図書館の成人式

開館20周年 公開座談会

2020年10月25日、図書館にゆかりのあるパネリストたちが
建設当時から20数年のあゆみを振り返り、これからの未来に想いを馳せました。

パネリスト

駒井 秀子 氏

石狩市文庫連絡会代表。石狩に本屋も図書館もない時代に自宅に私設文庫を開設しました。図書館基本計画検討委員会の委員として、図書館の開設に当たり多くのアドバイスも。

田岡 克介 氏

前石狩市長。図書館の建設時から行政側の立場として、市民の思いを受け止めながら深く携わりました。退任後は、市民として図書館に通い詰めています。

松谷 初代 氏

石狩市民図書館協議会委員。養護教諭を退職後、よみきかせ 子っ子の会の会員として市内の児童館や小学校、図書館などで絵本の読み聞かせ活動を展開しています。

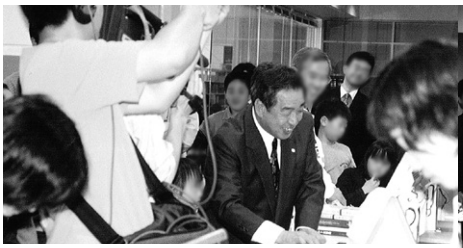
岩崎 真理子 氏

おはなしボランティア「びっくりばこ」代表。舞台役者の経験を生かし、おはなし会活動の幅を広げています。過去には運営委員として図書館まつりのポスターなども手掛けました。

吉岡 律子

石狩市民図書館職員。オープン当初は小学生で、利用者として図書館に通った経験も。公開座談会では司会・コーディネーター役を務めました。

イベント当日の様子を動画で公開しています



▲▶2000年の図書館オープン日に、自動貸出機を操作する田岡さん。当日は大勢の来館者のほか、テレビ局などの取材クルーも。

※1）プロポーザル方式

プロポーザル方式とは、複数の企画提案の中から最も優れた提案をした者を選出するものです。図書館の建設では、建築設計を委託する上で必要な創造力や技術力、経験に基づく豊かなノウハウなどが最も適した設計者を選んでいます。選出後は、具体的な設計を発注者である図書館側との共同作業で進め、質の高い建築物の実現を目指しました。

吉岡　市民図書館は「図書館の中に街をつくろう」をコンセプトに設計されました。当時行政側にいらした田岡さん、図書館建設までとコンセプトが決まるまでの経緯をお聞かせください。

田岡　石狩町時代は、火の車のような財政の中、大型施設をどのように造るか議論がありました。市民からは体育館、公民館、公会堂と、たくさんの施設が求められましたが、昭和40年代に急に大きくなった町で、多くのお母さんたちの「これから子どもを育てるためには図書館は絶対に必要」という熱い思いが、最終的に図書館を建設する選択になりました。

「本屋、図書館・図書室など何もなかった街だったから『いしかり文庫』を開設しました」

――駒井秀子

吉岡　建設に当たり、専門的な判断はどのように行われましたか？

田岡　通常の建築工事は金額入札で落札する方法を採用していましたが、図書館はお金だけでは計れないこと――市民の思いをどのように表現するか、柔軟な発想をどうやって具体的にするかなどの知恵が必要だと思いましたので、初めて**プロポーザル方式（※1）**で決めました。図書館情報大学や北海道大学の先生、その中に市民の代表の方にも入っていただき、今の図書館のような全体の雰囲気やイメージをつくり上げていきました。

吉岡　「図書館の中に街をつくろう」というコンセプトはどのように決まりましたか？

田岡　図書館では、これをしてはいけない、静かでなくてはいけない、というのが普通ですが、果たしてそれで本当に本に親しめるでしょうか。私は図書館こそ、これからの地方自治の中で大切な役割を果たすと考えました。図書館は人々が集い、交流し、自由に自分たちの意見を言い、それを具体化する場所であってほしい。だから排他的ではなく、自由の象徴として、図書館の中に街をつくろうと思いました。何よりも街の人たちが図書館に集い、気楽に交流できる場所であってほしいな、と。

エントランスに木がありますよね？　あの木には「言の葉」の意味も込められています。図書館の中に街をつくって多くの人たちが言葉を大切に、本を大切に、会話を大切にしようという願いから、あそこに木があります。

吉岡　ベンジャミンという木ですが、あれがあるだけで雰囲気が違いますね。

【裏表紙写真：ベンジャミンの木】

吉岡　駒井さんには町民のお一人として図書館建設に関わっていただきましたが、当時の様子はいかがでしたか？

駒井　私は北海道で一番早く図書館ができた町、函館の生まれです。家も図書館の近くにありました。ですから私にとって、身近に図書館があることは当たり前で、石狩に越して来た時に「図書館がない!?」と驚き、図書館が欲しいと強く思いました。

吉岡　図書館の開設に当たり、駒井さんには多くのアドバイスをいただきました。施設面でのこだわりや、図書館に込めた思いなどをお聞かせください。

駒井　私が1975年に石狩町へ来たときは、本屋一軒、もちろん図書館・図書室もありませんでした。ですから図書館ができる2000年まで、私たちは25年待ったことになります。ただ、1977年ころには私設の「柏水親子文庫」が本町地区にありましたが、花川地区には文庫が一つもなかったため私が「いしかり文庫」を開設しました。その後、各町内会にお母さんたちの文庫が開かれていきました。もちろん、行政には図書館建設の要望を出していましたが、それを待つだけではなく、今育っている子どものために自分たちの近くに本のある場所をつくりたいという気持ちがとても強かったのですね。

吉岡　石狩「市立」ではなく「市民」図書館としたのは

エントランスホールにある喫茶コーナー。図書館では珍しく地元の旬の野菜が並び、まるで“八百屋さん”のよう。

石狩市文庫連絡会の駒井さんによる読み聞かせ。

1999年の図書館建設中の写真。石狩「市民」図書館になる瞬間。

なぜですか？

田岡　図書館に「市民」があるかないかで気持ちが違ってきますよね。「市立」図書館とすると、行政が読ませてあげる、見せてあげる、これしてあげる、あれはだめというような、従来の古典的な図書館の運営のイメージが非常に強くなりますが、石狩の図書館は市民力、市民の声がつくったと言っていい。それにかつての町の時代には、図書館も大型施設も全く造れない財政状況だったので、具体的な検討に至らなかったと思います。また当時、議会の中でもいろいろありましたが、頑張ってくれた議員の方もいましたしね。図書館に「市民」と付けたことで、それからの石狩市の行政にも大きな影響を及ぼしたと思っています。

吉岡　そうしたこだわりは建物にも反映されていて、とりわけ「おはなしのたまご」には思い入れがあると聞きました。

駒井　子どもへの読み聞かせは、私たちが図書館でぜひやりたかったことでした。ほかの人が本を読んだり借りたりするところで子どもたちにお話を聞いてもらうのは落ち着かず、そういう場所が欲しかったのです。「おはなしのたまご」にはただペンキで色を塗るのではなく、お茶碗やカップのかけらを持ち寄ろうと、子どもたちをはじめ市民に呼びかけました。すると、いろいろな方がかけらを持ってきてくれ、それをたまごに張ったのです。

吉岡　エントランスホールには大島龍さんの青い大きな版画がありますね。

田岡　図書館を造るとき、当時の斉藤市長が大島さんに制作を頼むと、大島さんが東大寺文書の和紙を持ってきてくれました。それは強さ・保存力・発色力も含めて素晴らしい紙で、ぜひ採用してくれと言うのです。図書館とみんなの気持ちを百年後、千年後に伝えたい、という思いを持っていると…。実はあの版画は完成していません。和歌で有名な枕ことばがありますが、青は奈良の青で、石狩の海とも掛けています。千年後、この青がどう変わるか。版画をよく見ると中は傷のような、ガラスのような模様になっています。だんだん日が当たって年数がたってくると版画の絵が変わるのです。「図書館よ、石狩のまちよ、永遠であれ」と大島さんは思いを込めて作っている。そういう思いで絵を見ると、20年たってずいぶん変わったと分かります。この青がこれからどのように変わるか楽しみですよね。図書館に来た時にはぜひ、この版画も見ていただければと思います。

吉岡　版画は完成しているものだと思っていたので、今お話を聞いて驚きました。なお、版画の左手には作品の説明と実際に触れられる見本がありますので、そちらでぜひ和紙の温もりを感じてください。

【裏表紙写真：光、風、水の大地―いしかり】

「自由の象徴として図書館の中に街をつくり、
誰もが本当に安心して行ける場所として、
名前も『市民』図書館に」――田岡克介

図書館ができたころ、松谷さんはお仕事をされていたとのことですが、当時と今の図書館の印象を教えてください。

松谷　私は花川に住んでいますが、図書館ができたころは働き盛りで、市役所方面には手続きをする以外は来ないという状況でした。そのため娘たちが大学受験生だったとき、「ママ、石狩に図書館ができたよ！ すごく勉強しやすいの」と聞いたのが、私にとって一番最初の情報でした。学生には勉強ができるスペースがとても魅力的だったのだと思います。

私が本格的に図書館を利用するようになったのは、仕事を離れてから。3、4歳になった孫を連れて、図書カードを作ったり、アイスクリームを食べたり、野菜を買ったり。こんなすてきな図書館があるのだとびっくりしました。

今、私は子っ子の会の一員としておはなし会をしてお

よみきかせ　子っ子の会で、絵本や紙芝居だけでなく、人形が付いた手袋を使いながら楽しいお話をする松谷さん。

毎年開催する図書館まつり。館内を飾り付け、楽しい企画も市民が企画・運営。

図書館まつりで、おはなしボランティア「びっくりばこ」による読み聞かせの風景。

り、よく友人や知人、そして今は親となった教え子たちに図書館で再会します。これも本当にすてきなことです。中には札幌市にお住まいの方も来て、「ここの図書館、すてきですよね！」「先生、ずっとやりたかった読み聞かせをここでできるなんて、いいですね！」と、声を掛けてくれることも。私にとっては、新たな出会いを作ってくれる図書館です。

吉岡　私も、図書館ができたときは小学校の高学年くらいで、お友達に誘われ自転車で来た思い出があります。また、ここで働くようになってからは、ある団体の方が自分が小学生だったときの校長先生だと気が付き、こんなところでもつながっていると驚いたことがありました。

岩崎さんは7年くらい前から図書館で活動されていますが、活動を始めた当時のことを教えていただけますか。

岩崎　私は東日本大震災を機に東京から石狩に移住しました。越してしばらくしたころ、「図書館で読み聞かせをやっているよ」と誘われ、びっくりばこに参加しました。そして入ってすぐ、「図書館まつりの運営委員になって」と言われました。この運営委員会では、市民が図書館まつりのコンセプトもテーマも全部決めています。図書館の方には雑務をお願いするだけ。本当に市民がまつりを運営していて、これにはびっくりしました。東京の図書館では考えられません。

あともう一つ驚いたのは、私の発する意見にも耳を傾けてくださり、いいものはどんどん受け入れて、改革してくれること！　普通、前例がないものは拒否されがちですが、「いいね、いいね」と意見が受け入れられる。石狩はすごいな、と本当に驚きました。

吉岡　石狩に越してから岩崎さんには本当にお世話になっていますが、舞台役者さんでいらっしゃったこともあり、いろいろなノウハウをお持ちで、図書館まつりもおはなし会も活動の幅を広げていただいています。

皆さん、もう少し補足したいことがあればお話いただけますか。

駒井　私から図書館の司書の皆さんについて。ここでは市民がとても運営に関わり、市民の力がすごいと言い、それはそうかもしれません。でも、そういうよく勉強した市民を相手にする司書の方はさらに勉強をしなければならず、私はやはりこの図書館への信頼は、そういう職員の皆さんの質にあると思っています。今の図書館は大変利用しやすく、例えば先日、道外の図書館から資料を借りる際にも面倒な手続きをちっとも嫌な顔をせずに、市民の気持ちに応えようとしてくださいました。その居心地の良さをぜひ申し上げたいです。

吉岡　駒井さん、ありがとうございます！

ほかに、書架や施設の工夫についてもお話いただけますか。

駒井　書架にはとてもこだわりました。書架と書架の間や、並べ方はまっすぐかカーブか、幅や建て方、段数などはどうするか、いろいろなことをみんなで考えました。書架にはものすごくお金がかかりますし、本をゆったり並べれば効率が悪いかもしれません。でも、見上げたときに本の背表紙がちゃんと見えて、そこに手が届くという楽しみなどを、みんなで話し合った覚えがあります。

吉岡　閲覧スペースの2人掛けのソファには、真ん中にライトが備えつけられています。このライトは隣の方と目線の合わない絶妙な高さにあるんですよね。また楕円（だえん）テーブルのライトも、座った時の目線の高さにあり、ふと目を上げたときに向かいの方と目線が合わないような

「図書館はさまざまな魅力があり、新たに出会いを作ってくれる場所だと思っています」――松谷初代

地域の貴重な資料を保管する特別収蔵室を図書館まつりで子どもたちに公開。

石狩翔陽高等学校科学部による夏休みのイベント・科学工作教室。

市内の団体が制作したノベルティなど、石狩市にまつわるさまざまなグッズを地域資料として収集。

工夫がされていると聞いたことがあります。

【裏表紙写真：書架・閲覧スペース】

＊＊＊

吉岡　続いて、〝これからの図書館〟について皆さんにお話を伺います。

　これからの図書館は、子どもたちの存在が重要な要素の一つかと思います。中学生のお子さんを持つ岩崎さんは、どのように感じますか？

岩崎　以前、おはなし会で参加者の声を聞いたところ、子育てをしていると自分の時間が全然ないという意見がありました。そこでびっくりばこで話したことがあるのですが、お子さんにはおはなし会を見てもらい、その間、保護者の方には自分の時間として好きな本を読んだり、カフェでお茶を飲んだりしてもらうのはどうかと。30分でも1時間でも、自分だけの時間が欲しいという親御さんもいらっしゃると思います。こういう取り組みを、読み聞かせ団体だけでやるより、市と連携して市の子育て支援としてできないかと思っています。例えば読み聞かせだけでなくても、図書館にいたら保育士さんやリタイアした方などに子どもを見てもらい、その間に自分の好きな本が探せる、図書館に行けば自分の時間が持てるというサービスができないかと思うのです。

吉岡　工作イベントでも、子どもが夢中になっている間、お母さんが少し離れて閲覧スペースで本を読む姿をよく見かけます。市の子育て支援担当課と一緒になって何か取り組んでいきたいですね。

　田岡さんにお話を伺いたいのですが、図書館には今後どんな要素があればいいと思いますか？

田岡　利用者として言うと、石狩には多くの刊行物、印刷物があります。ただ、残念ながら図書館に行っても、例えば「石狩刊行物コーナー」のようなものがなく、自分で探さないとだめ。いろいろな市民団体や市民活動が出す印刷物を図書館に収めるという習慣があまりないんですね。地方図書館の役割として今からでも遅くありません。集めるのも、これから発行するものも、とにかく図書館には紙になっているものは全部ある、となったらいいなと思います。そうすると、ここが石狩の情報館に変わります。これからは、さまざまな情報ツールを使いながら石狩のまちを知っていただく時代になっていき、石狩に住む人材はどういう人がいるか、それを図書館で見つけるために、紙が確かにあるということはすごく重要だと最近思っています。

「図書館まつりも本当に市民が運営していて新しい意見が前向きに受け入れられる、石狩はすごい！」――岩崎真理子

吉岡　図書館は地域資料をたくさん収集しています。例えば町内会の周年記念誌や、石狩市の広報ももちろん集めています。また、いろいろな団体が毎月発行しているチラシなどを地域資料として収集しています。活動している方がとても多く、集めきれていないのが現状ですが、なんとか頑張っています。

　石狩グッズも集めていて、例えば道の駅ができたときの缶バッジや、石狩町時代に町内で配られたハマナスのイラストが描かれたマッチ箱などを、石狩特有のグッズとして図書館で登録しています。それらは職員が企画する特集展示で披露することもあります。今年は「石狩市グッズ、見たことがありますか？」と、これまで収集してきたグッズを一堂に会して展示しました。今後も、これらを収集する仕組み作りや工夫をしたいと思っています。

　駒井さんは幅広く活動する中で、図書館で今後必要だと思うことはありますか？

駒井　私が「石狩町の女性史年表」を作ったとき、321冊

NPO法人ひとまちつなぎ石狩による「中古本リサイクル市ブックマーチ」。読まなくなった本を集め、次の読み手のもとへ。本と人と地域をつなぐ取り組みの一つです。

図書館職員による出前ブックトーク（花川南小学校）。

※2）「広域利用図書館における住民の利用・非利用行動 ― 石狩市住民調査をもとに」

北海道武蔵女子短期大学の河村芳行教授によるアンケート調査の論文（2018年3月）。アンケートは2017年10月に、無作為抽出の市民2,000人を対象に行われました。

の資料を参考にしましたが、探すのに図書館の方にずいぶん助けていただきました。貴重な資料をきちんと保存することは、図書館の大きな役割だと思います。今は「北海道の子ども史年表」を手掛けていて、現状で860冊ほどの資料を参考にしています。地区で発行したものから学校が発行したものまで、北海道全体にわたってできる限り読むとなると、図書館がそういったたくさんの資料をいつでも見られる状態で保存してくれることはとても大事なことだと思います。

吉岡　今、図書館の蔵書は約30万冊です。それでも利用者の方々から読みたい本のリクエストをいただいたときに、当然ですがないものもたくさんあり、購入の検討をしたり、ほかの図書館から借りたり、工夫しながら提供できるようにしています。

ところで、図書館の大きな特色の一つとして、数多くのボランティアさんの活動があげられますが、岩崎さんは実際に活動する中で何か感じることはありますか？

岩崎　高齢化が進み、若い方がなかなか入ってきてくださらない問題はどこのボランティア団体も抱えていると思います。きっとこういう活動があることを知らないだけで、知ればやってみたいという方もいるのではないでしょうか。実際にやってみたら楽しいですし、生きがいになっている方もたくさんいます。でも、こういう活動をやっていること自体が知られてなく、図書館に行ったこともない若いお父さん、お母さんもいます。そういった方にも周知していくことがとても大切だと。例えば、小中学校の保護者向けにチラシを配るなど、もっと必要だと思います。

「まちの図書館の使命として地域資料を集める仕組みづくりと、皆さんにご紹介する活動を」――吉岡律子

吉岡　今、図書館で活動している皆さんは本当にそれぞれが素晴らしいノウハウをお持ちで、そのノウハウをどんどん人に伝えながら、幅広い年代の交流が生まれるようになればいいなと願っています。松谷さんはどのようにお考えですか？

松谷　「これからの図書館を考える」というテーマでいろいろと探してみましたら、**「広域利用図書館における住民の利用・非利用行動―石狩市住民調査をもとに」**（※2）というアンケート調査がありました。市民2千人を対象にしたものですが、例えば、非利用者に「図書館は役に立っていると思いますか？」と尋ねたところ、なんと98・1％の方が「役に立っている」と答えています。自分は利用していなくても「家族や子どもが利用している」「生涯学習の基盤として必要」「地域交流や憩いの場として必要」、そして「市には図書館は必要」と言うのです。調査の最後には、「非利用者の中には、本は自分で買うという人たちがいて、なかなか行動は変わらないかもしれません。以前は図書館に来ていた利用者と子どもは、これからの図書館を考えるときにとても大切なターゲットになるのでは」とまとめられています。

それで、私はこれからの図書館のキーワードは「つなげる」であり、次のことが大事だと考えました。一つは「人と本をつなげる」。図書館は本を見て借りるところですが、それだけでは人と本はつながらない時代です。もっと手軽で楽しいツールがたくさんあり、どうやって本と人をつなげるのか――そのアイデアは図書館がまとめたアンケートにありました。まずは特集コーナーの設置。これは図書館で用意している毎月のコーナーで、「興味がなかった本と出合ってすごく良かった」という声がありました。

また、私は読み聞かせをしているので、子どもたち、特に小学4～6年生にはブックトーク（本の紹介）を積極的

ボランティアサークル「布の絵本にじ」が作った布のおもちゃのバースデーケーキ。ろうそくをイメージした「20」の数字は図書館の職員が作りました。

「図書館の成人式」では、20周年のバースデーソングを市内のアコーディオンサークルが生演奏。

▲フロアボランティアが企画する上映会。

▼図書修理ボランティア。2009年～2021年1月にかけて、約9,300冊の本を修理しました。

に取り入れています。小さい時にあんなに一生懸命に絵本を読んであげたのに、小学2～3年生になるとあまり本を読んでいない。子どもたちに本をつなげる意味で、ブックトークは大事だと思います。

本と人をどうやって出合わせるか、そんな仕組みをもっと考えるといいのではないでしょうか。例えば、本を借りた方に「感想をお寄せください」という小さなカードを渡し、その本の周りにこの本を読んだ感想が貼られていくとか。

次に「人と人をつなげる」。図書館はたくさんのボランティアに支えられています。でもボランティア同士、実はお互いをよく知りません。こんなとき、さまざまなボランティアの活動を紹介する拠点があると、そこで、「退職したけど、どんなボランティアがあるかな?」と見て、「本の修理、手が器用だからやりたい」という方が生まれるかもしれません。そういった人と人をつなげる、ボランティアの活動拠点となる資料の収集や、それを見られる場所が今、図書館に求められているのではないかと思います。

この間、子っ子の会のみんなで「私たちはおはなし会を知らせるポスターは作るけど、会に入りませんかというポスターは作らないよね?」と話していました。「こんな活動をしています、皆さんどうですか?」というポスターが図書館を通して広まっていったら、いろいろなボランティアがまた新たな仲間として加わってくるのではないかと考えています。

吉岡　特集展示は職員が担当して行っていますが、広い館内の中に収められている本を特集でひとまとめにすると、普段手に取らなかった本も提供できるのではと、工夫を凝らしながらやっています。過去には、「中学生向けの本を中学生の目線から紹介すると、興味を持ってくれるのでは?」と、中学校の図書局にお願いして本を選んでもらい、おすすめの文章も書いてもらったことがありました。この特集は大盛況で、すぐに本がなくなりました。そうしたいろいろな形で本と皆さんをつなげる活動になればと感じます。

またボランティアさんについて、図書館には「こんなことはできますか?」といったご依頼をいただくことがあります。そんなとき、「こちらはびっくりばこさんがかなえてくださるかも」とご紹介して、新たな関わりができたこともありました。そうやって活動の輪が広がるといいですよね。

松谷　もう一つ、すてきな子どもの声を紹介しますね。ある小学校でブックトークをしている時のことです。2020年に行われた「第2回小学生がえらぶ！〝こどもの本〟総選挙」(NPO法人こどもの本総選挙事務局)で、『ざんねんないきもの事典』が1位に選ばれています。これは、生き物は進化したけれども、あえてたくさん残った残念なところに焦点を当てた本です。子どもたちに「人間も進化したけれど、残念なところは?」と聞くと、ある子どもが「心」と答えてくれました。そこで今度は、「弱くなった心を強くするものは何?」と尋ねると、「先生、本があるよ！ だって本は心の栄養って言うでしょう」という答えが返ってきたのです。私はそのすてきな答えが今でも忘れられません。

＊＊＊

吉岡　今日は皆さま、本当にありがとうございました。座談会の後半では、図書館がしっかりと資料を提供すること、また地域の図書館ならではの地域資料の収集や、子育て支援の関係、本と人、人と人がつながるような図書館ができたらいいとのご意見をいただきました。

皆さまのお話から、石狩市民図書館は、町に図書館を求め、永きにわたり活動を続けてきた住民の想いが形になった図書館であること、そして、開館してからも多くのボランティア・関係団体に支えていただいていることを強く感じました。これからも、いつまでも愛される図書館づくりに、変わらず皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

それでは座談会も終了に近づきました。本日は図書館の成人式ということで、お祝いのケーキをご用意しています！ バースデーソングの演奏も、どうぞよろしくお願いします。

市民と図書館の20年

1992
- ○石狩町図書館構想策定委員会で図書館建設計画がスタート

1993
- ○図書館開設準備室を設置

1994
- ○市制記念事業として、図書館事業計画の作業を開始

1997
- ○「石狩市図書館基本計画」を策定
- ○プロポーザルで㈱環境設計を設計者に選定

1998
- ○図書館の建設が始まる

市民からの提案により開催された竣工前の見学会

1999
- ○石狩市文庫連絡会が「優良読書グループ北海道表彰」を受ける

2000
石狩市民図書館オープン

- ○第1回図書館まつり
- ○「北海道福祉のまちづくりコンクール」優秀賞受賞
- ○「第1回バリアフリー・デザイン賞」大賞受賞

この日は4,500人が来館し、貸し出しの列は児童コーナーまで続きました。開館記念講演のゲストは椎名誠さん

2001
- ○開館1周年「週間ブックレビュー」「世界ハート展」を開催

児玉清さんの司会に、渡辺淳一さんや羽仁進さんなどの豪華ゲストが出演

2002
- **日本図書館協会制定「建築賞」受賞**
- ○石狩市文庫連絡会が「優良読書グループ全国表彰」を受ける

2003
- ○入館者が100万人を超える

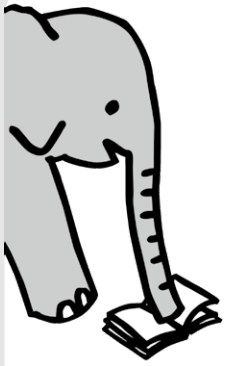
2004
- ○「公共建築賞」優秀賞受賞

2005
- ○石狩市、厚田村、浜益村合併
- ○厚田分館、浜益分館を設置

2006
- ○石狩市文庫連絡会が「子どもの読書活動優秀実践団体」として文部科学大臣表彰
- ○ブックスタート事業を開始
- ○入館者が200万人を超える

2007
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが「第5回手づくり布の絵本全国コンクール」で初入賞

こんなことがありました



開館20周年を記念して

2020 「図書館の成人式」を開催

2008
- ○若葉小学校（現・双葉小学校）に市内初の学校図書館司書を配置
- ○「子どもの読書活動優秀実践図書館」として文部科学大臣表彰

2009
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが石狩市教育委員会より「芸術文化功績章」を受ける（「第6回手づくり布の絵本全国コンクール」入賞の実績による）
- ○「これからの図書館がめざすもの ―石狩市民図書館ビジョン 2010―」を策定

2010
- ○開館10周年事業「ゴーゴーゴー10周年」を実施
- ○双葉小学校の学校図書館と市民図書館のオンライン化を実施
- ○入館者が300万人を超える

2011
- ○おはなしボランティア びっくりばこが石狩市教育委員会より長年の読み聞かせ活動に対する「教育功労章」を受ける
- ○震災支援で交流がある宮城県名取市図書館、友好都市の石川県輪島市立図書館と「友好図書館協定」を締結

2012
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが石狩市教育委員会より長年の読書活動の推進に対する「教育功労章」を受ける
- ○沖縄県恩納村文化情報センターと「友好図書館協定」を締結
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが「第9回手づくり布の絵本全国コンクール」最優秀賞受賞

2013
- ○小檜山博文学を読む会が石狩市教育委員会より長年のボランティア活動と地域文化の振興に対する「教育功労章」を受ける
- ○NPO法人ひとまちつなぎ石狩（ぽぽらーと）が石狩市より「市制施行20周年記念表彰」を受ける

2014
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが石狩市教育委員会より長年の読書活動の推進に対する「教育功労章」を受ける
- ○沖縄県恩納村文化情報センターと「友好図書館協定」を締結
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが「第9回手づくり布の絵本全国コンクール」最優秀賞受賞

2015
- ○小檜山博文学を読む会が石狩市教育委員会より長年のボランティア活動と地域文化の振興に対する「教育功労章」を受ける
- ○NPO法人ひとまちつなぎ石狩（ぽぽらーと）が石狩市より「市制施行20周年記念表彰」を受ける

2016
- ○図書修理ボランティアが石狩市教育委員会より長年のボランティア活動に対する「教育功労章」を受ける

2017

図書館職員等が宮城県名取市の避難所で読み聞かせ、図書館再開を支援

- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが石狩市教育委員会より「芸術文化功績章」を受ける（「第5回手づくり布の絵本全国コンクール」初入賞の実績による）
- ○石狩市市民活動情報センター「ぽぽらーと」が運営する図書コーナーで、図書の貸出・取寄等サービスの連携を開始
- ○東日本大震災被災地支援
- ○第1回科学の祭典in石狩
- ○フロアボランティアが石狩市教育委員会より長年のボランティア活動に対する「教育功労章」を受ける
- ○厚田分館に代わり、機能を統合した厚田小学校あいかぜとしょかんで「地域開放事業」を開始
- ○厚田童話を読む会が石狩市教育委員会より長年の読み聞かせ活動に対する「教育功労章」を受ける
- ○雑誌スポンサー制度を開始
- ○沖縄県恩納村図書館準備室との交流事業として「恩納村図書館まつり」参加と司書1名の実習受け入れ
- ○ボランティアサークル 布の絵本にじが「優良読書グループ北海道表彰」を受ける

いつもありがとうございますピョ

石狩市民図書館を支える

ボランティア・団体の皆さん

19●●年 年号は設立年

1991年 石狩市文庫連絡会

2000年 ボランティアサークル「布の絵本にじ」

2000年 フロアボランティア

2000年 おはなしボランティア「びっくりばこ」

2006年 石狩市民図書館 図書修理ボランティア

2006年 ブックスタートボランティア

2002年 小檜山博文学を読む会

2009年 よみきかせ 子っ子の会

1982年 厚田童話を読む会

1991年 ひまわりの会

2003年 石狩市郷土研究会（村山家文書を読む会）

2004年 おはなしのんな

2018年 おとなも絵本を楽しみ隊「おおきな木」

2005年 サイエンスアイ

2004年 NPO法人 ひとまちつなぎ石狩

※マスクを着用していない写真については、団体の希望により過去のものを掲載しています

20th Ishikari City Library

開館20周年に寄せて

図書館と深い関わりを持つ皆さんに、
開館20周年への思いを寄せていただきました。

羽田 美智代（はねだ みちよ）氏
NPO法人
ひとまちつなぎ石狩　理事長

市民図書館へ愛をこめて

開館20周年おめでとうございます。今も思い出すのは、2000年6月3日の石狩市民図書館の開館式典に、市民との協働で生まれた図書館を象徴するように、門出を祝おうと千名あまりの市民が、あふれるほど来場した光景です。

当時、私は石狩市議会議員であり、また、図書館運動の市民団体（当初「石狩町に図書館づくりをすすめる会」、その後「石狩市民図書館とあゆむ会」）の会員で、それまで石狩に理想の図書館をと、夢の実現に向け尽力を惜しみませんでした。図書館開設準備室が開館7年前にできたのも画期的で、提言のため検討委員会に市民を参加させること、当時、石狩市が進めていた市民参加や情報公開制度の充実などを遂行するよう、議会では図書館建設に向け、それらを盛り込むようにと質問し、石狩市の回答を得ていました。計画段階から関わることができたことは、誇らしく感無量です。

当時、議会は全議員が建設に賛成ではなく、私は建設提言内容を進めるために、高い評価の佐賀県の伊万里市民図書館へ視察調査に行くのが良いと小会派の議員たちに提言。伊万里市の人口は当市と同じくらい、案内してくれた方は、市民団体の代表者で、市民とともにつくり上げた図書館に、参加議員も大変感銘を受け、石狩の図書館建設へ後押しをと、有意義な研修になりました。

「図書館の中に街がある」というコンセプトは斬新で、建設前から市民が関わったことは民主的で行政と連帯感を感じます。私は2004年にNPOを立ち上げ、現在、石狩市市民活動情報センター「ぽぽらーと」を運営し、図書館から団体貸出された本の貸し出しや予約本の手渡しを行っています。今も図書館の応援団でいられることに感謝です。

下村 憲一（しもむら けんいち）氏
株式会社環境設計　代表取締役
北海道科学大学　客員教授

夢の結晶としての公共図書館

開館20周年おめでとうございます。今でも図書館に伺うたびに、どのコーナーにも人が大勢おられて、多くの市民に利用されているのをうれしく見ています。設計者としてこれ以上の喜びはありません。こうした図書館が生まれるにはその誕生に関わった方々の熱い想いと多くの夢が重なっており、それが結晶化されていった時間を今でも思い出します。

1992年に市政記念事業として開始された図書館づくり、多くの方々の尽力により1997年に石狩市図書館基本計画が策定されました。その計画に基づき設計者選定プロポーザルコンペが行われ、「図書館の中に街をつくろう」という私たちの提案が最優秀に選ばれ、設計を任されました。

その当時助役の田岡克介前市長から「石狩は若い街です。それにふさわしい若々しい図書館をデザインしてください」と激励されました。図書館開設準備室長の石沢修元館長は「まずこの本を読んでから設計を！」と一冊の本を渡してくれました。それは基本計画をまとめた菅原峻氏の著書「これからの図書館」。先生は当時、日本の図書館計画の第一人者であり、完成まで監修していただきました。また設計アドバイザーとして植松貞夫先生（元・図書館情報大学副学長）も加わり、こうした機会をいただいたことは生涯の宝です。

設計は事務所のスタッフだけではなく、多くのデザイナーとの協働により進められました。閲覧家具は大阪克彦、児童コーナーは煙山泰子、外構は斉藤浩二、サインは久須美英男の各氏をはじめ、図書館開設準備室の丹羽秀人氏（現・函館市中央図書館館長）などの市関係者の皆さんと、設計完了まで連日のように、図書館のあり方について議論を重ね、デザインをまとめました。20年たって振り返ると、私の建築家人生で石狩市民図書館の設計は忘れがたい時間となりました。

渡邉 斉志（わたなべ ただし）氏
長崎県立長崎図書館・
ミライon図書館
（長崎県立・大村市立一体型図書館）館長
（国立国会図書館から出向中）
※石狩市民図書館　元館長

石狩市民図書館開館20周年に寄せて

石狩市民図書館の開館20周年、おめでとうございます。2008年から2年間、図書館長を勤めさせていただきましたが、当時の出来事はついこのあいだのことのように感じられます。図書館でボランティア活動をしてくださっている方々や、さまざまな市民活動で図書館と関わってくださっている方々とお会いするのは、私にとって何よりも楽しい時間でした。研修室や館長室などで歓談したこと、図書館の裏手に立っている桜の木を一緒に眺めながら「満開になるのは来週くらいでしょうかねえ」などと雑談したこと、真冬の地吹雪の日にバッテリーがあがってしまったボランティアさんの車に私の車からケーブルをつないでエンジンをかけたこと、秋の図書館まつりで運営委員の方々と一緒に準備作業をしたことなど、どれも鮮やかに思い出されます。

これからの20年もきっとさまざまなことがあると思います。図書館を利用している方の中には、市民図書館ができたときにはまだ生まれていなかった人が既に大勢いらっしゃるでしょうし、今後も、石狩に新たに移り住んできた方々が図書館で活動してくださるようになってゆくことでしょう。

石狩を離れてから10年になりますが、私にとって石狩は特別な場所であり、石狩こそが故郷と言っても過言ではありません。そんな「一市民」として、遠く離れた場所からではありますが、図書館づくりの活動から関わってこられた方々、私自身が図書館でご一緒させていただいた方々、そして人生のなかのいっときを図書館で過ごしたたくさんの方々のおひとりおひとりに思いを馳せつつ、これから市民図書館に足を運んでくださる人たちを、「ようこそ石狩市民図書館へ！」という気持ちでお迎えしたいと思っています。

加藤（かとう） 龍幸（たつゆき）

石狩市長

市民協働の象徴としての石狩市民図書館

石狩市民図書館は、開館20周年を迎えることができました。これまで図書館を支えていただきました市民や利用者の皆さま、ならびにボランティア、関係団体の皆さまに心より感謝を申し上げます。

昭和40年代以降、まちの人口急増に合わせるかのように、私設文庫の開設や「石狩町に図書館づくりをすすめる会」が発足するなど、図書館を求める声は住民の中で高まっていきました。図書館の建設は、1995年の石狩町図書館構想策定委員会からの提言や石狩市図書館基本計画の策定など、数々の場面で市民意見を反映すべくさまざまな議論がなされ、実現に至りました。

当時の市役所では、地方分権にふさわしいより良いまちの姿を市民と市がともに考える市民参加のシステムを作り上げようと活発な議論がされており、2000年の図書館開館の翌年には「石狩市行政活動への市民参加の推進に関する条例（市民の声を活かす条例）」が制定されました。市民の想いが結実した石狩市民図書館の誕生は、この条例が目指す「まちの在り方」を、目に見える形で示したともいえるものでした。

図書館の原動力は、建設に至るまで、また開館してからも多くの市民参加によるものです。読み聞かせなどの場面では、たくさんの子どもの笑顔が生まれ、子どもの読書活動の推進につながっています。本の修理や布の絵本の制作、数々のイベントの開催など、ボランティアや関係団体の皆さまのご尽力によってさまざまな取り組みが展開されておりますが、このことは、石狩「市立」図書館ではなく、石狩「市民」図書館の名称がふさわしいことを体現していると思います。

これまでの20年で市民の皆さまに愛されてきたように、これからも多くの方々から親しまれることが石狩市民図書館の使命ととらえ、さらに魅力あふれる図書館づくりを進められることを期待しております。

佐々木（ささき） 隆哉（たかや）

石狩市教育委員会　教育長

石狩市民図書館の可能性

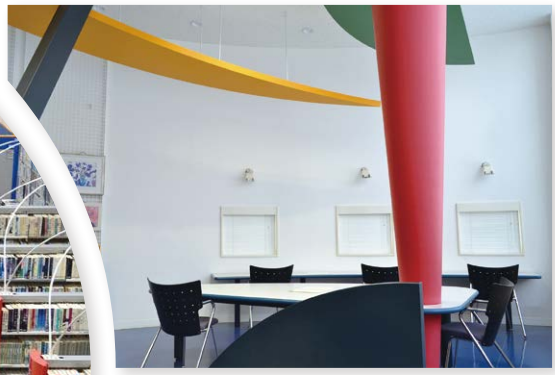
石狩市民図書館は、石狩市の新たな生涯学習拠点として2000年にオープンし、おかげさまで開館20周年を迎えることができました。この記念すべき2020年は、大変残念なことに、新型コロナウイルスの大流行によって図書館は臨時休館を余儀なくされ、予定していた記念事業も中止や変更などの対応に苦慮することとなりました。しかし、このような中だからこそ見えてきた「図書館の可能性」を感じた年でもあったように思います。

緊急事態宣言が発出され、臨時休校や不要不急の外出自粛要請により、市民が自宅で過ごす時間が増えました。この間、図書館では、休館中も電話やインターネット予約で蔵書を貸し出し、多くの市民からご利用いただきました。さらに、ボランティアが制作した「布の絵本」の読み聞かせ動画を作成し、インターネットで配信するなど、「おうち時間」の充実に少しでもお役に立てるよう、挑戦を続けてきました。石狩市民図書館は「図書館の中に街をつくろう」というコンセプトのもと、「滞在型」の図書館としてデザインされておりますが、コロナ禍によって新たな可能性を見い出すことができました。

また、今年は毎年開催している図書館まつりも中止に追い込まれましたが、「代わりに、館内に20周年の特別装飾をさせていただきたい」と関係団体や市民から申し出をいただくなど、各方面から寄せられた図書館への深い思いに大きな感銘を受けました。

これからも石狩市民図書館は、時代や情勢の変化に合わせて、市民や利用者の皆さまと協働しながら、さらなる進化を続けていけるように努めてまいりますので、今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

書架・閲覧スペース



ベンジャミンの木

「光、風、水の大地―いしかり」大島龍 作

図書館の受賞歴

2000年　「北海道福祉のまちづくりコンクール」優秀賞受賞
　　「第1回バリアフリー・デザイン賞」大賞受賞
2002年　日本図書館協会制定「建築賞」受賞
2004年　「公共建築賞」優秀賞受賞

「鳥の碑」本郷新 作

石狩市民図書館 開館20周年

市民とともに歩む図書館

2021年3月12日発行

編集・発行　石狩市民図書館
〒061-3217　北海道石狩市花川北7条1丁目26　☎0133-72-2000　FAX 0133-73-9120
https://www.ishikari-library-unet.ocn.ne.jp/
制作 ㈱キューブコーポレーション　印刷 ㈱アイワード